

2023年9月10日

主日礼拝

《礼拝》

礼拝讃美歌⇒13 番
『我が主よ星の輝く』

聖書⇒コリントの信徒への手紙一 13:4~8、11~13 節（MM 姉）
『愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。
礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。
不義を喜ばず、真実を喜ぶ。
すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。
愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、

幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。』

礼拝讃美歌⇒293 番（旧 206 番）
『限りなき愛』

聖書⇒コヘレトの言葉 1:1~2 節（HT 姉）
『エルサレムの王、ダビデの子、コヘレトの言葉。
コヘレトは言う。なんという空しさ／なんという空しさ、すべては空しい。』

聖書⇒フィリピの信徒への手紙 3:18~21 節（MY 姉）
『何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたした

ちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。』

聖書⇒コロサイの信徒への手紙 1:21~22 節 (SK 兄)

『あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。』

(祈)

礼拝讃美歌⇒219 番 (旧 146 番) (TM 兄)

『栄えにて』

《パン裂き》

聖書⇒コリントの信徒への手紙一 11:23~26 節 (SK 兄)

『わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。』

(式)

礼拝讃美歌⇒401 番 (旧 286 番)

『主よいのちの御糧を』

《建徳》

聖書⇒マルコによる福音書 6:6b~13 節 (SK 兄)

『それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようとしめない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい。」十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。』

聖書⇒マタイによる福音書 9:36~38 節

『また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう
に、収穫の主に願いなさい。』

聖書⇒ローマの信徒への手紙 6:4、8 節

『わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。

わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。』

聖書⇒創世記 2:18~25 節 (読順 19~20、18、21~25) (NH 兄)

『主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりしなかった。』

聖書⇒詩編 70:6 節

『神よ、わたしは貧しく、身を屈めています。速やかにわたしを訪れてください。あなたはわたしの助け、わたしの逃れ場。主よ、遅れないでください。』

聖書⇒出エジプト記 18:4 節

『もう一人は、「わたしの父の神はわたしの**助け**、ファラオの剣からわたしを救われた」と言って、エリエゼルと名付けた。』

聖書⇒詩編 121:1~2 節

『【都に上る歌。】目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの**助け**はどこから来るのか。
わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。』

聖書⇒ヨハネによる福音書 14:16 節

『わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。』

礼拝讃美歌⇒284 番（聖歌 476 番）（SK 兄）

『静けき河の岸辺を』

《建徳要旨》